

Title	清水潤三氏提出學位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.33, No.1 (1960. 12) ,p.118- 121
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19601200-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙 報

清水潤三氏提出學位請求論文審査要旨

主論文

「蝦夷の種族に関する研究」

大和朝廷が國內の統一にあたつて、最もながい年月と多大の努力をついやしたのは、エミシの經營であつた。しかるにエミシがいかなる種族であつたかということについては、いまなお學界において定説をみないのであつて、國史における最も困難、且つ重大な問題の一つである。本論文は、この問題の解明を目的としたものであつて、まず序論において、エミシ種族論の變遷と發展とをのべている。江戸時代においては、古代のエミシは當時エゾとよばれたアイヌと全くおなじものと解され、古代のエミシと近世のエゾとが區別されるべきものとは、ほとんど考えもされなかつたのであるが、明治時代にいたつて、考古學や人類學の進歩につれて、エミシ・アイヌ説に疑問をいだくものがあらわれ、エミシ非アイヌ説、すなわちエミシは本來大和民族とおなじ種族であつて、ただ邊境に居住したものにすぎないという新説が唱えられて、主として考古學界や人類學界において有力であり、これに對

して史學者や言語學者には、文献にもとづいてエミシ・アイヌ説を支持するものが多く、この兩者の對立していることをのべている。ついで從來の諸説の方法論を檢討批判して、つよくその缺陷を指摘し、新しい方法論を提唱している。すなわち、エミシという特定の種族が存在するならば、それは(一)独自の體質、(二)獨特の物質文化、(三)固有の言語、(四)固有の風俗をもち、(五)特色ある社會をつくり、(六)限定された居住地域に生活したはずであるから、その證據が確認されるかどうかを檢討すること、右の各項目にわたる研究結果が、大和民族の特徴を示すか、それともアイヌと同一種族であることの確實な中世以降のエゾと類似するかを檢討して、エミシが大和民族であるか、アイヌであるかを立證すべきこと、また古代エミシの文化と、最近の考古學によつて明らかにされた東北地方の縄文文化とを對比して、それがいかなる結果を示すかを検討することの必要を説き、エミシの種族研究の體系を立て、その研究結果の確率によつて結論をえなければならぬことを主張している。

本論の第一章においては、從來の研究が古代エミシがいかなる文化を保持していたかについて十分な理解をもたず、とくに考古學の成果によつてエミシの種族を推定しようとし、さらにまたエミシと日本石器時代人との關係を知るためには、エミシ文化の復原が基礎的作業であるのに、それがなおざりにされていたことが致命的缺陷であることを指摘し、ついで生業、衣服、住居、言語

文化階梯、社會組織の各項にわたつて、文献にもとづいてエミシ文化の復原をこころみ、古代エミシのうちには、その一部大和民族に同化して農耕をいとなみ、編戸の民となるものがあつたにしても、本來狩獵漁撈の民であり、特異な言語をもち、なお石器時代の文化にとゞまり、政治社會の發達をみるにいたらぬ未開の種族であり、従つて大和民族とはいちじるしく異なつた種族であつたことをのべている。

第二章と第三章においては、エミシの種族に關する關係諸科學の成果を批判しつつ著者の見解をのべている。まず第二章の史學にもとづく研究においては、種々の文献を檢討してエミシを大和民族以外の特定種族となすのが正しいこと、またエミシに「毛人」の字をあてているのは、その多毛性を示すものであり、その眼を形容して「老鷓目」と記しているのは、カナツボマナコであることを指したのであつて、このような身體的特徴は、明らかに大和民族と異なり、アイヌの特徴に合致するものであることをのべている。歴史地理的研究においては、古代エミシの住地を檢討して、それらの地方に古代エミシ以外の異族が居住した徴證がなく、かえつて中世以降においては、エゾすなわちアイヌが住んでいたことが確實であるから、住地をおなじうする點からみて、エミシとエゾ、従つてアイヌと同一種族であつたことが推定されるとしている。民族學的研究においては、「飲血」、「白鹿信仰」、「短弓の使用」、「毒矢の使用」などのエミシの特異な風俗、習慣、信

仰が、アイヌにおいてもみられるのに、大和民族と共通するものがみとめられないことを明らかにしている。言語學的研究においては、主として先人の説にもとづいて、エミシやエゾという語がアイヌ語であること、また古文獻にあらわれたエミシの人名、地名において日本語と異なるものがあり、とくに地名においては、アイヌ語の「ベツ」の存在することを指摘して、エミシ・アイヌ説の有力であることを説いている。

第三章は、文献以外の資料にもとづく考古學と體質人類學との成果と批判とであつて、エミシ・アイヌ説に對する否定的見解は、これらの學界においてはなほだ有力であるにもかかわらず、著者じしん考古學研究者でありながら、この説の肯定論者であることは注意されねばならない。まず著者は、從來の考古學者の所説を學史的にとりあげて批判し、考古學的研究の困難と、從來の研究の缺陷とを指摘し、つぎに今日の東北地方における考古學的概觀をこころみ、いかなる文化が、いかなる特色を示しつつ分布したかを明らかにし、またこれらの考古學的知見が、多くの學者によつていかに解されているかをのべ、そうして東北地方における繩文文化の終末が奈良時代であること、彌生文化が仙臺以南では六・七世紀ごろ繩文文化と接觸して存在したが、以北ではその傳播の痕迹をみるものがあつても、一つの時代を劃するまでの發展をみなかつたこと、前期古墳文化が七世紀に仙臺以南に波及したけれども、後期古墳文化の傳播が八世紀に入つてからであること、

以北の地では後期古墳文化が變容した形で受け入れられ、ほとんど縄文文化に直接つながつたとおもわれること、土師器によつて代表される奈良時代の文化も、いちじるしく様相を變じて以北の地方にあらわれているが、それは九世紀以降のことであることをのべ、右の年代觀によつて、エミシが縄文文化人とみなすことができるとなしている。ついで體質人類的研究においては、まず日本石器時代人種論の史的概觀をなし、現在の學界において有力であるエミシ非アイヌ説が幾多の弱點を内包することを明らかにして、體質人類學的研究の結果が、何等他の科學の研究成果を拘束しうるものでないことを論じている。

第四章は、古代エミシと中世以降のエゾとの比較研究であつて、おなじ蝦夷の文字をもちいながら、古代ではこれをエミシとよみ、中世以後ではエゾとよむために、兩者を異種族となす説があるに對し、著者は、文献にあらわれた兩者の身體的特徴や、生業、言語、風俗、習慣等の文化的諸相、及び遺蹟、遺物の比較によつて、兩者にいちじるしい類似點のあることを明らかにして、兩者が同種族であることを論じ、さらに文化様相の空間的考察をなして、同時代に文化の程度を異にしたエミシが混在したことをのべている。

結論においては、以上四章にわたつて論究した見解を要約して、エミシ・アイヌ説の成立と、日本石器時代人アイヌ説とを主張している。

さてエミシの種族系統に關する從來の研究は、史學や言語學のような、主として文献にもとづくものにしても、あるいは考古學や體質人類學のような、主として遺物、遺蹟にもとづくものにしても、それぞれの専門の立場だけにとらわれたものが多く、従つて一方的な、かたよつた見解であることは、まぬかれなかつた。ここにおいて著者は、その弊をかえりみて、從來の諸説を批判しつづ、ひろい視野のもとに綜合的研究をこころみ、ことに從來比較的閑却されていた歴史地理的研究や民族學的研究を加えたごときは、本論文の大なる特色である。

さらに著者は、古代のエミシと中世のエゾとの關連をもとめ、また中世のエゾと近世のアイヌとの關連をもとめて、それらがいずれも同一の種族であることを明らかにし、かくて古代のエミシがアイヌであることを論斷したごときも、また本論文の特色と言つてよい。

ただ著者の異常な努力にもかかわらず、言語學的研究において、かならずしも十分とは言えず、また考古學的、及び體質人類學的研究において、從來の諸説に對する批判がすこぶる痛烈で、正鵠をえているけれども、著者じしんの見解、すなわち石器時代人アイヌ説においては、斯界の現状ではやむをえないとは言え、やや積極性のとほしいうらみがあり、そこに批判があるであろう。しかし独自の研究方法と見解とによつてこの困難な問題をさらに前進させたことによつて、わが學界に貢獻するところ、すこ

ぶる大なるものがある。よつて著者に文學博士の學位を授與する
價値あるものとみとめる。

昭和三十四年十二月二日

主査委員

慶應義塾大學文學部教授 文學博士

國史擔當 松本芳夫

慶應義塾大學文學部教授 文學博士

國史擔當 今宮新

慶應義塾大學文學部講師

考古學擔當 藤田亮策

三田史學會例會

第四六二回例會 卒業論文發表會

昭和三十五年二月一日、二日 於三十一番教室

左に卒業生諸君の論文題目を掲げる。

國史專攻

日本母系制の研究

淺岡道子

徳川時代に於ける日本橋魚市場

飯田浩

古代浦島傳説の史的構造

林廣一

吉田神道についての一考察

——吉田兼俱の事歴を中心として——

板倉知雄

江戸・横濱間鐵道免許をめぐる外交問題

加藤二郎

郡司制度の特殊性について

柿本昌宏

日本初期自動車文化

小林義明

俘囚についての一考察

前田禮子

橘宿彌諸兄

松浦節

太政官札發行當初の流通についての一考察

三井高宣

本木昌造論

松島忠

織田信長の本願寺對策

太田充

——石山戰爭——

中齋大鹽平八郎

——天保の亂を中心として——

鳴原幸次

黄泉の國神話の研究

諏訪俊二

續日本紀の災異記載について

田中良明

寛文四年上州碓氷郡原市村

竹中重彦

檢地水帳にあらわれた「長吏」について

平賀源内とその時代

山本令郎

——風刺精神を中心に——

出雲神話について

安田友彦

「家族」主として江戸中期に於ける家族構成の研究

弓削祥子

東國防人について

藤江英夫